

学会ニュース No.142

2022年10月31日 全日本博物館学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

國學院大學博物館学研究室

Tel : 03-5466-0268 E-mail : jimu@museology.jp

*** 目次 ***

学会ニュース連絡事項・会員情報……1

《2022年度学会行事》

「市原市歴史博物館見学会参加記」……2

《投稿記事》

「ユニバーサル・ミュージアムーさわる！

“触”の大博覧会」岡山巡回展プレ展示お

よび岡山県立美術館「暗闇WS - さわって、
はなして、みる」体験報告……4

《投稿記事》

ICOM プラハ大会

「博物館の定義改正」……7

《書評》

『文化財が語る 日本の歴史』……8

《書評》

前川公秀著『博物館の近代-朝鮮総督府
時代の様相』……10

2022年度研究会「日本の博物館にお けるSDGsの達成状況と課題」 12月5日（月）開催案内

博物館に限らず、公共機関は2030年を目標としてSDGsを成し遂げる責任があります（ICOMサステナビリティワーキンググループ）。2022年度も後半にさしかかり、多くの博物館がこれらの目標と関連した活動をしつつ、自らエネルギー消費を減らし、廃棄物を減らし、人々の暮らしと関わりながら、ゴールに向けて具体的な取り組みをすすめていくことが重要と思われまふ。このような問題意識を共有しつつ、課題を整理していきたいと考えています。

日時：2022年12月5日（月）午後7：30～9：00

場所：オンライン開催（ZOOM）

講師：大阪市立自然史博物館学芸課長

佐久間大輔氏

申し込み方法：Googleformsにて受付

（先着80名様）

<https://forms.gle/nYB8rTWxAbMoD3gQ8>



お申込みいただきました、
当日のZoomURLを、研究会前日ま
でにメールでお知らせいたします。

受付期間：2022年10月24日～2022年12月3日

問い合わせ先：全日本博物館学会 行事担当

zenpakugyoji@gmail.com

学会ニュース PDF 化について

この度、学会ニュースのPDF化・電子化に伴い、紙媒体の印刷から段階的に移行致します。

当初、HPにて公開・雑誌送付時に同封。その後はHPにおいてのみ公開に移行致します。また、紙媒体での送付希望についても対応致しますが、詳細が決定しましたらまた別途ご報告致します。

会員情報

入会者（正会員6名）

翁 みほり	（おきな みほり）
中山 智貴	（なかやま ともし）
井本 悠紀	（いもと ゆうき）
岡本 備	（おかもと そなう）
原島 恵	（はらしま めぐみ）
福田 一葉	（ふくだ かずは）

退会者（正会員0名）

※上記入退会者に関しては10月時点

【会員数】 [2022年10月現在]

一般会員（学生会員含む） 468名

賛助会員 10団体

※紙面の関係で委員会議事録については次号にてお知らせいたします。

※各記事の投稿は事務局までご連絡ください。

市原歴史博物館見学会参加記

日 時：2022 年 8 月 29 日(月) 13：45～16：30

場 所：千葉県市原市能満 1489 番地

参加者：11 名

はじめに

2022 年 11 月 20 日に開館予定の市原歴史博物館を開館前に訪問する機会をいただき、鷹野光行館長からまず概要や経緯をうかがい、展示室・収蔵庫・歴史体験館など各施設を学芸員の方々のご案内のもと見学した。

1 館の概要

愛称は「I'Museum」(アイミュージアム)で、「市民を主人公に。」をコンセプトに、「いちばら」の頭文字と「私」という意味の「I」に Museum を合わせ、ここに市民ひとりひとりが「わたし」の博物館と感じられるような博物館を目指す想いが込められている。

I'Museum は、市原歴史博物館、歴史体験館、フィールドミュージアムの 3 つの柱から成る。歴史博物館は I'Museum Center (アイミュージアムセンター)、そして史跡などの歴史遺産が広がる市内各地域を I'Museum Field (アイミュージアムフィールド) ととらえ、市内全域が歴史の舞台でありフィールドミュージアム(屋根のない博物館)、地域に点在する歴史遺産はフィールド展示(野外展示)である。

歴史博物館の外壁は明るい茶色で印象的だなと感じていたら、房総の山と土をイメージしたものだろうか(写真 1)。



写真 1 博物館外観



写真 2 フィールドガイダンス展示

2 展示室

エントランスホールにはフィールドガイダンス展示がある(写真 2)。まずこちらで市内全域の立地関係を把握し、フィールドミュージアムの全体像をとらえることができる導入の部分である。

民俗展示室では生活の道具や技が紹介されている。壁面がそのまま大きなスクリーンになって、そこに映像が映し出される。その映像を見ていくと、壁面に展示されている五大力船の舵(実物資料)と当時の舟運の解説映像が見事に重なり合って、視覚的・体感的に船の大きさを理解できる流れに、思わず感嘆の声が出た。学芸員のアイデアを元に作られた映像だそうだ。

常設・企画展示室では、高い天井や可動間仕切りなどを眺めながら、通史展示の準備状況を見学した。地域に即して歴史を追い、旧石器時代から近現代まで進む。デジタル化された市原市域の地図は、おそらく地域の人々が訪れて興味深く自分の知っている場所を探さだろうと想像しながら、自分もあちこち拡大しては楽しんだ。

中央には「王賜」銘鉄剣の展示コーナーが準備されている。市内の稲荷台 1 号墳から出土した国産最古の有銘鉄剣であり、国立歴史民俗博物館に寄託されていた。このたびの開館にあたり実物が展示される。間違いなく市民の宝であり、公開が待ち遠しい。その展示ケースも設置段階で見せていただけて、色々と勉強になった。

まだ完全な形になる前の展示室、空の展示ケース、ここにこれからいよいよ実物資料が並び、それを観覧する人々が訪れ、展示空間が息吹いていくと思うと、やはりわくわくする。

3 歴史体験館

次に歴史博物館を出て隣に移動する。そこに、全天候型屋内体験学習施設となる歴史体験館があった。旧屋内ゲートボール場2面をリノベーションしたそうで、中に入ると、とにかく広い。屋根はあるが、外気とも通じており、足元は土の地面で、外のような中のような不思議な、そして自由な雰囲気を感じる居心地の良い空間である。

当日いただいた歴史博物館のチラシには、「市内で実際に発掘された古墳や住居跡を再現し、発掘調査の体験、竪穴建物での生活体験、古代衣装を着る体験、昔の遊びや農具の体験、様々なものづくり体験ができます」と説明されている。

歴史体験館の入口から入って正面にもものづくり広場があり、机や椅子と大き目の黒板が備えられている。あたかもここに集う子どもたちの楽しげなざわめきが聞こえるようである。

ものづくり広場の左側には発掘現場、古代住居、右側には古墳、納屋風建物が再現されている(写真3・4)。それを一つずつ中に入って見学させていただいたが、面白かったのは、それらが形成途中(作りかけ)の状態であるということ。

古代住居は部分的に骨組みの状態で、その内部構造がよくわかると同時に、建物内に入って天井を見上げ、その骨組みを眺めながら、ここに屋根が葺かれて出来上がった住居の中はどのような感じになるのだろうと思いを巡らす。

納屋風建物も、半分は躯体だけで屋根も瓦も土壁もまだない。ここから徐々に建物が作り上げられていく様子が理解でき、最終的に完成する立派な納屋の姿を想像するという楽しみを与えてくれる。この日に見た(そして触った)真新しい木材が、10数年後にまた来た際には、時間とともに相応に風化し、良く知る古びた柱になって、変わらずに納屋を支えながら迎えてくれるに違いない。

その頃には今の市原の子どもたちがきっと大人になっている。そして大人になってきつとまた来る。そんな願いも込められているように感じた。

「作り途中」のものが作り上げられ、完成に至る過程そのものを思い描きながらの体験は、参加している子どもたちの成長に必ずや資すると思われる。ほかにも体験を通して子どもたちが学ぶしかけがたくさんある。そこに博物館の今後の可能性を見て、感銘を受けた。



写真3 歴史体験館（古代住居ほか）



写真4 歴史体験館（納屋風建物ほか）

4 まとめ

最後にもう一度博物館内の一室に戻り、補足説明や質疑応答の時間を設けて頂いた。展示室や体験館で実際に見たあれこれについて、細かいことも含め、鷹野館長や学芸員の方々にご教示いただき、実りのある学びの時間となった。

「市民とともに発展(成長)する博物館」は、すなわち、いつ訪れても常に新しい博物館であるということなのかもしれない。

と言っても、現時点ではその姿を確認できているわけではなく、私自身もまたそれを確かめに何度もこの館を訪れなければならないと思うに至る。それもまた楽しみだ。

おわりに

今回の研究会のお知らせに「開館後は基本的に誰でも訪問できるところを、敢えて開館前を見学させていただくことで、博物館ができていく様子を体感できる、そういう場を用意します」とあって、喜んで参加したのだが、まさにその通り。学会の研究会ならではの貴重で得難い機会、充実した見学会となったと思う。

見学を受け入れてくださった市原歴史博物館の皆様、企画してくださった方々に、心から感謝申し上げます。

(奥田 環 お茶の水女子大学歴史資料館)

「ユニバーサル・ミュージアム—さわる！“触”
の大博覧会」岡山巡回展プレ展示および岡山県
立美術館「暗闇 WS - さわって、はなして、みる」
体験報告

1. はじめに

2021年9月2日から同年11月30日にかけて、国立民族学博物館にて特別展「ユニバーサル・ミュージアム — さわる！“触”の大博覧会」が開催された。英題は、“UNIVERSAL MUSEUM”: Exploring the New Field of Tactile Sensation ⁽¹⁾。スローガンは、「さわるとわかる、わかるとかわる！」であり、特別展の目的は、「「ユニバーサル・ミュージアム＝誰もが楽しめる博物館」の具体像を示すことだった」⁽²⁾ という。その最初の巡回展が、来年

(2023年) 4月1日から5月7日にかけて、岡山市KURUN HALL (クルンホール) にて開催される予定である。そのプレ展示が、今年 (2022年) 9月23日から10月23日にかけて、岡山市内「杜の街グレース」にて開催された。また、同じく今年10月に、岡山県立美術館で『暗闇ワークショップ—さわって、はなして、みる』が開催された。本稿では、その体験を報告する。

2. ユニバーサル・ミュージアムとは

体験報告の前に、「「ユニバーサル・ミュージアム」とは何か」について、特別展の実行委員長であった広瀬浩二郎氏の言葉を、著書『世界はさわらないとわからない 「ユニバーサル・ミュージアム」とは何か』(平凡社、2022年7月発行)の中から紹介したい。

(中略)「ユニバーサル・ミュージアム」は和製英語である。通常、英語で「Universal Museum」といえば、総合的な調査研究・展示を展開する大規模な博物館を指すことが多い。特別展の実行委員長である僕は、日本で生まれた独自の概念として「ユニバーサル・ミュージアム」を世界に発信したいと考えている。

まず、ユニバーサル・ミュージアムとは、ユニバーサルデザインの理念を博物館美術館に応用した取り組みだが、単なる障害者対応、弱者支援というレベルにとどまるものではない。

「誰もが楽しめる」を実現するために、健常者(マジョリティ)の価値観・世界観にインパク

トを与え、博物館の常識・固定観念を問い直す。こうして、新たな普遍性を築くのがユニバーサル・ミュージアムの要諦である。(p.48)

「ユニバーサル」のほかにも、「インクルーシブ」「アクセシブル」「SDGs」...さまざまなキーワードがある。今年2022年8月に決定したICOMによる博物館の新定義には、以下の2文が含まれる。“Open to the public, accessible and inclusive, museums foster diversity and sustainability. They operate and communicate ethically, professionally and with the participation of communities, offering varied experiences for education, enjoyment, reflection and knowledge sharing ⁽³⁾.” アクセシブル、インクルーシブとユニバーサルの違いについて、広瀬氏は考察を重ねている ⁽⁴⁾。誰が誰を「インクルード」するのか。誰が誰を「誰一人取り残さない」のか。その主語が暗に示すものは何なのだろうか。

3. 岡山県立美術館『暗闇ワークショップ—さわって、はなして、みる』体験報告

岡山県立美術館では、2011年度から岡山県立盲学校との連携が続いており、この連携をきっかけに、さわることに注目したワークショップも生まれた ⁽⁵⁾。ユニバーサル・ミュージアム事業『暗闇ワークショップ』(以下、『暗闇WS』)は、年1~2回、継続して開催されてきたが、コロナ禍で2年半、開催見合わせとなり、今年(2022年)3月に再開された ⁽⁶⁾。今回10月が、今年2回目の『暗闇WS』であった。前回3月の『暗闇ワークショップ—さわって、つくって、みる』については、岡本

(2022)「実践報告「暗闇ワークショップ—さわって、つくって、みる」」⁽⁷⁾や岡山放送 Web サイト ⁽⁸⁾ に紹介されている。

今回、筆者は小学生の子どもと一緒に、親子で「じゅにあ・ミュージアム・Lab『暗闇WS—さわって、はなして、みる』(2022年10月9日午前の部)」に参加した。WSのチラシには、以下のように書かれていた。

「真つ暗闇の世界で、「作品を”みる”」体験をしたことはありますか？暗闇の中で使えるのは、視覚(みる)以外の感覚器官です。視覚以外の感覚器官(聴覚：きく／味覚：あじわう／

嗅覚：におう／触覚：さわる）を活かして、暗闇のスペシャリスト・広瀬浩二郎さん、そして彫刻家の北川太郎さんと一緒に、暗闇の中で「さわって、はなして、みる」世界を楽しみましょう。」⁽⁹⁾

当日、アイスブレイクの時間に、広瀬氏からは、3つのメッセージ…1-さわらないと分からないことがある、2-さわり方：まず手のひらで大きくさわ、次に指先で細かくさわる、3-さわるときは優しく。なぜなら、それをつくった人があるのだから。その作り手のことを考えれば、荒くさわることはできないだろう…が語られた。そして、いよいよ暗闇の展示室へ。大人の腰の高さのあたりに一本のロープが道筋のように張られており、それをさわってたどりながら歩いた。作品は、一定間隔をあけて、3つ置かれていた。参加者1組ずつ、一つの作品の前で立ち止まる。広瀬氏の声がけとともにさっそく鑑賞が始まった。しばらくして、北川氏から、各作品の題名が紹介された。私たちが最初にさわった作品は『時空ピラミッド』、二つ目は『静けさ』、三つ目は『島』だった。作品名を聞かないまま、さわって鑑賞することで作品を思い描いていたので、自分の頭の中で描かれたもの（イメージ）と作品名を聞いた印象が重なるものもあれば、ギャップを感じるものもあった。鑑賞の最後には、参加者一人一人が感想を述べていった。それを受けてみんなも鑑賞だけではなくて、創作をしているように感じた、というメッセージが北川氏から寄せられた。

暗闇 WS の間も、終了後も、さわった作品を目で見る機会はなかった。頭の中に、さわりながら思い描いたものが残っている。作品は岡山県立美術館の収蔵品であり、いつか展示される機会があることや、当日、杜の街グレースで開催中であった「ユニバーサル・ミュージアム」岡山巡回展プレ展示で、北川氏の作品がいくつか展示されていることが紹介された。筆者も、WS 終了後、その会場へと向かった。

4. 「ユニバーサル・ミュージアム—さわる！ “触”の大博覧会」岡山巡回展プレ展示

約 20 点の作品が展示されており、すべての展示にさわることができた⁽¹⁰⁾。作品は、

- ・三木製作所によるさわられる立体地図：「立体世界地図」、「富士山立体地図」

- ・片山博詞氏によるヒトの彫刻：「ひとのかたち・「REQUIEM—昇華される記憶—」、「ひとのかたち・「K 嬢—夏—」
- ・北川太郎氏による石の彫刻：「時空ピラミッド」、「時空の種子」
- ・富長敦也氏による石の作品 4 点：「イタリア産トラバーチン / 2015 年、大阪府豊中市でのプロジェクト」、「石川県産戸室石 / 2016 年、福井県、福岡県、北海道他でのプロジェクト」、「イタリア産大理石 / 2017 年、大阪府池田市でのプロジェクト」、「能勢産黒御影石 / 2018 年、大阪府池田市でのプロジェクト」及び記録映像
- ・大塚オーミ陶業(株)による陶板名画：「「ひまわり」 / ゴッホ、「風」 / 加山又造、「高松塚古墳壁画・西壁女子群像」
- ・渡辺泰幸氏による土の音具：「土の音」
- ・岡本高幸氏による体験型の古墳型の彫刻：「「とろける身体—古墳をひっくり返す」であった⁽¹¹⁾。

「土の音」は、球の形のものが 5 つ、平たい形のものが 3 つ、台に置かれており、いずれも細長い空隙が上部にあった。そばにはたたいて鳴らすための棒が置いてあり、色々な角度から様々な強弱で音を鳴らして聴くことができた。作品に手を置いて鳴らしたときの音と、手に響いてくる振動など、さわり方で変化する音や、手に響く感覚もあわせて楽しむことができた。

「「ひまわり」/ゴッホ」（大塚オーミ陶業(株)）は、目をとじて集中して何度もさわったが、描かれた絵を思い浮かべることに到底たどり着けなかった。平面に描かれた絵をさわって、手や指先から入ってくる情報を頭の中でつないでいき全体のイメージを作ることの難しさを感じた。オランダにあるゴッホ美術館（Van Gogh Museum）においても、「Feeling Van Gogh」というプログラムで「ひまわり」にさわることができるという⁽¹²⁾。両者の「さわられる絵画」の作り方にも興味をもった。この日、私自身はさわって頭の中で画を描くことはできなかったが、絵に体全体を伸ばしてさわることができた感動は大きかった。

「暗闇 WS」で一つ目にさわった作品と同じ題名である『時空ピラミッド』（北川太郎）にも出会うことができた。WS でさわったものとまったく同じものではない。昨年度、国立民族学博物館特別展で展示されていた『時空ピラミ

ッド』(北川太郎)は、より大きなサイズであり、自分の記憶とはこの数日後につながった。

5. 「さわる」ことの意味とは

特別展のスローガンは、「さわるとわかる、わかるとかわる！」であった。「さわる」ことの意味とは何だろうか。私自身も、今回の体験をふりかえって考えた。

今回の暗闇 WS に参加して、視覚をつかわずにさわって鑑賞して感じたことの一つは、自分自身との対話だった。さわっては思い描いていく中で、こんな形かな、どうやって作ったのかなど、自分で自分に語りかけているような時間が多くあった。臨床発達心理士である山口

(2006)によれば、触覚には、他の感覚にはない独自性があり、それは、アクティブタッチ

(触覚と運動が結びついて対象を知覚するはたらき)を可能にする固有感覚にある⁽¹³⁾という。そして、固有感覚は、全身の隅々に至るまで感じる感覚であるため、自己の意識とも深く関わっているのだという⁽¹³⁾。暗闇 WS の中で、自分自身との対話が印象に残ったのも、触覚、固有感覚に関係しているのかもしれない。

もう一つ強く印象に残ったのは、さわり心地と温度であった。特に温度は、さわること、さわられている方もさわっている方も温度が変化していく。さわること、自分と、その「もの」とにつながりが生まれたことが、熱による皮膚温の変化(熱伝導)からも感じられた。

固有感覚は触覚といっしょになって環境を探り、さらに環境を変える機能をもつが、視覚をはじめとする他のどの感覚も、この重要な機能をもたない⁽¹⁴⁾という。見たものを組み立てる、手加減しながら調理するといった「知覚しながら環境を変える行動」に重要な役割を演じている触覚・固有感覚⁽¹⁵⁾。「さわるとわかる、わかるとかわる！」の過程を触覚・固有感覚、アクティブタッチに注目し探究していきたい。

「見る」だけでなく、「さわる」「かぐ」「聴く」「動かす」など、展示、博物館を楽しむさまざまな方法や環境があると、「見る」への過度な依存がやわらいでいくだろう。多感覚をもちいてうまれる博物館体験と、そこから生まれる変化や交流に注目していきたい。

注記・引用文献

1. 国立民族学博物館 (2022) 過去の特別展。特別

展「ユニバーサル・ミュージアム ― さわる!“触”の大博覧会」

https://www.minpaku.ac.jp/en/ailec_event/16856 (2022年10月検索)

2. 広瀬浩二郎 (2022) 世界はさわらないとわからない 「ユニバーサル・ミュージアム」とは何か。平凡社

3. ICOM (2022) Museum Definition.
<https://icom.museum/en/resources/standards-guidelines/museum-definition/> (2022年10月検索)

4. 広瀬浩二郎 (2021) 博物館から社会を変えるー公開シンポジウムの成果ー. 国立民族学博物館編集, 広瀬浩二郎編「ユニバーサル・ミュージアム ― さわる!“触”の大博覧会」小

さ子社, pp. 214-215及び前掲広瀬(2022)ほか.
5. 岡本裕子 (2016) 対話を用いた教育プログラムの立案ー美術館と盲学校の連携からー. 広瀬浩二郎編著「ひとが優しい博物館 ユニバーサル・ミュージアムの新展開」青弓社, pp. 36-49.

6. 岡本裕子 (2022) 実践報告「暗闇ワークショップーさわって、つくって、みる」。岡山県立美術館「美術館NEWS」第138号, p. 3.

7. 前掲 岡本裕子 (2022)

8. OHK岡山放送 (2022) 【手話が語る福祉】触るアート！？目隠しをして暗い室内で…ユニバーサルミュージアムとは(2022年4月5日)
<https://www.ohk.co.jp/data/16478/pages/> (2022年10月検索)

9. 岡山県立美術館 (2022) 10月じゅにあ・ミュージアム・Lab「暗闇WSーさわって、はなし、みる」参加者募集(ちらし)

10. Screens (2022) 岡山放送、「ユニバーサル・ミュージアムーさわる!“触”の大博覧会」岡山巡回展プレ展示イベントを開催(2022年9月28日) <https://www.screens-lab.jp/article/28320> (2022年10月検索)

11. ユニバーサル・ミュージアム岡山巡回展プレ展示作品解説シート

12. Van Gogh Museum (2022) Feeling Van Gogh.
<https://www.vangoghmuseum.nl/en/visit/whats-on/feeling-van-gogh> (2022年10月検索)

13. 14. 15. 山口創 (2006) 皮膚感覚の不思議ー「皮膚」と「心」の身体心理学。講談社。
(島 絵里子 大阪市立自然史博物館外来研究員/北海道大学大学院)

ICOM プラハ大会で博物館の定義が改正

第 26 回 ICOM 大会が、8 月 20 日から 28 日までチェコ共和国の首都プラハで開催された。ICOM 大会は 3 年ごとに開催されるため、京都大会の開催から早くも 3 年が経過したことになる。4,600 人もの現地参加者が京都に集まったことが、今から考えれば夢か幻のように思えるが、新型コロナウイルスの感染拡大後は、オンラインやハイブリッド形式での会議がすっかり定着したように思われる。

さて、ICOM プラハ大会は、「博物館の力：私たちを取り巻く世界を変革する (The Power of Museums: Museums have the power to transform the world around us)」のテーマの下、ICOM 大会史上初のハイブリッド開催であったが、リモートを含め 3,400 人を超える参加者があり、現地には日本から筆者を含め二十数人が参加した。

今大会の最大の眼目は、ICOM 規約に定める「Museum」の定義の見直しであった。京都大会で MDPP (博物館の定義、展望、可能性に関する特別委員会) が提案した新たな定義案が、長時間にわたる議論の末に採択が延期され、その余波で会長等役員が大量に辞任するという事件もあったことは記憶に新しい。その後、改めて地域バランスにも考慮した ICOM-Define (博物館定義特別委員会) が設置され、18 か月にわたって 11 の段階 (Step) と 4 回の協議 (Consultation) を行う透明性を確保した計画的な審議が行われた。最終的に提案された改正案は、各国内・国際委員会等から提出されたキーワードやフレーズを順番も含めて慎重に検討して構成したもので、8 月 24 日に開催されたラウンドテーブルでは、拍子抜けするほど大した議論にならなかった。というのも、ハイブリッド開催のために、その後に予定されている臨時総会の投票は、投票権者が自分のパソコン等からオンラインで参加する方式であったため、既に多くの参加者が結論を出していたであろうことは明白だったからである。したがって、発言内容の多くは ICOM-Define メンバーの努力を讃えるようなコメントばかりであった。臨時総会で発表された新たな定義案の投票結果は、賛成 487 (92.41%)、反対 23 (4.36%)、棄権 17 (3.23%) で、圧倒的多数をもって採択された。新たな定義案は、以下のと

おりである。

A museum is a not-for-profit, permanent institution in the service of society that researches, collects, conserves, interprets and exhibits tangible and intangible heritage. Open to the public, accessible and inclusive, museums foster diversity and sustainability. They operate and communicate ethically, professionally and with the participation of communities, offering varied experiences for education, enjoyment, reflection and knowledge sharing.

博物館は、社会に奉仕する非営利の常設機関であり、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈し展示する。一般に公開された、誰もが利用できる包摂的な博物館は、多様性と持続可能性を促進する。倫理的かつ専門性をもって、コミュニティの参加とともにミュージアムは機能し、コミュニケーションを図り、教育、楽しみ、考察と知識の共有のための様々な体験を提供する。

(ICOM 日本委員会仮訳)

今大会のもう一つの注目点は、ICOM ウクライナから複数の参加があったことで、大会に先立って開催された執行役員会において、倫理規程の見直しの一環として紛争に対処するためのプロトコルを優先的に議論するよう勧告が出されたことは注目に値する。世界各地で紛争や自然災害が起きている中で、博物館防災の在り方も重要視されている。新たな ICOM 戦略計画 (2022-2028) も策定され、今大会で新たに選出されたエンマ・ナルディ会長 (イタリア) のもとで、ICOM は次のステージに入っていくことになるだろう。

多様性、包摂性、持続可能性等が求められる国際的な博物館の潮流の中にあって、来年度から施行される日本の改正博物館法は、どのような運用がなされるのであろうか。日本だけが従来の博物館観に囚われ、文化観光を指向していたままでは、世界から取り残されていくことになる。当学会としても積極的に関係方面に声をあげていくべきではないだろうか。

次回 (2025 年) 大会開催地はアラブ首長国連邦 (UAE) のドバイで、ハイブリッド式の開催となる。日本からも多くの参加を期待したい。

(栗原 祐司 京都国立博物館)

《書評》

『文化財が語る 日本の歴史』

會田康範・下山忍・島村圭一編

2019（平成31）年の文化財保護法改正をひとつの契機に、このかん文化財の保存・活用をめぐる議論が高まりを見せていることは周知のとおりである。そこには、観光資源という文脈から文化財活用の可能性を強調する意見があるいっぽうで、そのような考えに対して、集客力のような経済効果から文化財が評価されることによって、文化財の商品化や消費が進むことを危惧する指摘も相次いでいる。

本書は、近年の文化財をめぐる議論に、歴史教育の立場からの主体的な関与がどれだけあったのかと疑問を呈する。文化財は歴史教育にとって不可欠な存在であるにもかかわらず、その観点からの文化財活用のあり方について、積極的な意見の発信が多くは見られなかったというのである。その背景には、これまでの歴史教育において、文化財を正面から取り上げたアプローチや文化財保護の意識涵養を目指した取り組みが十分になされてこなかったことや、授業を担当する教員の意識や専門性にかかわる潜在的な課題があるとする。

そのうえで、本書では、博物館や学校の現場で歴史教育に携わる9人の執筆者が、それぞれの実践に依拠しながら、文化財が歴史を語るという仕立てで具体的な歴史教育へのアプローチを提示し、文化財保護の意義の啓発およびその意識涵養を目的とした論考を展開している。そこに通底するのは、文化財の保存・活用に主体的に関与できる担い手や支援者の育成こそが、文化財保護をめぐる課題を解決する根本的な糸口であるという考えであるといっていよいだろう。

本書の構成は、序章・第1章 原始古代・第2章 中世・第3章 近世・第4章 近代・終章となっている。導入の序章では、本書のねらいや文化財保護の思想・制度の概要が説明され、それに続く第1章から第4章では、それぞれの時代区分に沿って、具体的な文化財を取り上げる形で、文化財を活用した歴史教育の可能性が論じられている。取り上げられている文化財は、貝塚・木簡・板碑・富士塚といった、いわば文化財としての評価がすでに定まっているものに加え、文化的景観としての棚田のように、比較的近年になって



文化財の範疇に捉えられるようになったものも含まれている。

さらには、地形図・商店街・学校資料のような現状の枠組みでは文化財としての位置づけが確立していないものまでも「未文化財」とカテゴライズしたうえで取り上げられており、文化財の範疇や定義を挑戦的・意欲的に押し広げようとする姿勢も本書を特徴づける要素となっている。

具体的な文化財についての論考では、それぞれの文化財の概要が簡潔に説明されたあと、「歴史的背景」「よみとく視点」「文化財を学びに活かす」といった共通の論点が、近年の研究成果や執筆者自身による実践等を踏まえ、比較的平易に記述されている。文化財を活用した歴史教育に関する具体的かつ実践的な示唆に富んだ内容となっており、学校教員をはじめ歴史教育に携わる人々にとって、まさに手引書として重宝されるであろう。

終章では、これまでの歴史教育における文化財の位置づけとその変遷が、学習指導要領での記述を追う形でまとめられている。そのうえで、今後の歴史教育の展望として、文化財を資料として活用するのみでなく、文化財保護の活動そのものを教材として扱うような学習を通して、身近なところから新たな文化財を発掘することにもつながるような、文化財への意識醸成を促す必要を提起する。

「文化財の保存と活用は対立するものではな

い」といった指摘をしばしば耳にする。そうであるならば、何をもって両者の関連あるいは接点を見出せるのか。そのひとつが、「教育」なのであろう。文化財を保存するにせよ、活用にするにせよ、もしくは、それらを両立させるにせよ、そこに主体的かつ倫理的に関与できる人々がいることが肝要なのであり、その点において「教育」が持つ意味が小さいはずはない。文化財をめぐる近年の議論に対し、「教育」の立場から再考を投げかける本書の意図には大いに頷かされる。

さて、近年の文化財をめぐる議論では、教育の立場からの関与が十分でなかったという構図は、このかんの博物館をめぐる議論にも当てはまるように思われる。博物館の場合は、社会教育の立場からの関与が十分ではなかったということになる。

博物館法を含めた法改正の動向をみると、博物館の社会教育施設としての位置づけの流動化が著しい。2019（令和元）年のいわゆる第9次地方分権一括法によって、博物館をはじめとする公立社会教育施設の首長部局での所管が可能となったことや、2022（令和4）年の博物館法改正によって、社会教育法に加えて、文化芸術基本法も博物館法の上位法としての位置づけを得たこと、さらには、博物館の事業として「文化観光」の推進が明記されたことに見るように、博物館の持つ教育以外の側面への注目や期待を背景に法や制度の変更が進められている。

それぞれの法改正に先立つ議論では、博物館の社会教育施設としての性格に十分に留意することの必要が指摘されてはいるものの、それはいわば建前的な反応としての感が強く、社会教育施設であることの意義を本質的に問うような議論の深まりを伴うものではなかった。もちろん、まちづくり・文化振興・観光振興などを含め、さまざまな機能を総合的に果たしうる施設が博物館であるので、教育施設としての側面を殊更強調する必要もないのかもしれないが、十分な検討もなされずに、あたかも、なし崩し的に博物館の社会教育施設としての位置づけが軽視されていくような状況には違和感を覚える。

その点からすると、本書は、文化財を活用した教育という観点から、博物館ならではの教育のあり方を考えるにあたって、様々な示唆を与えてくれる。博物館教育の論考としても価値のある一冊となっている。歴史教育を主題とする本であるから、当然、歴史系博物館との関わりが強い

内容ではあるが、「文化財が語る」という構図は館種を問わず参考になるものであろう。

いっぽうで、本書では、終章に象徴されるように、全体を通して、学習指導要領への言及が多いことが目立つ。具体的な教育の場面も、学校での児童・生徒を対象としたものを想定している場合が多いようである。子どもの頃から文化財への意識を高めておくことが大切であることは確かであろうし、それゆえ学校教育での文化財活用が求められることもよく理解できるが、歴史教育を学校教育のカリキュラムを基準として捉えてしまうことは、その発展性や可能性を狭めることにつながりはしないであろうか。

学校教育とは関わりのないかたちで、大人になって、あるいは、高齢になって、歴史を学ぶことの意義や醍醐味を感じ得る人も大勢いるだろう。博物館教育、あるいは、社会教育という立場で考えれば、そうした学校教育の枠組みとは別の次元で展開される教育が、一段と意識されても良いように思う。

誤解のないように補足をすれば、本書のなかにも、そうした学校教育にとらわれない歴史教育の視座が見て取れる箇所もある。第1章の貝塚を取り上げた論考では、縄文時代の検討が、人類と戦争をめぐる哲学的な問いの再検討や、自然との共生という点からの現代社会のライフスタイルの見直しにつながりうることが力強く論じられている。ともすると、論に飛躍があるといった批判を受けかねないかもしれないが、学校教育の枠組みなどを意識せずに、大胆に展開される歴史教育の魅力の一端を提示しているようでとても興味深い。

もし、本書が単に文化財を活用した歴史教育のガイドブックとして捉えられてしまうことがあれば、それは惜しいことである。歴史教育、あるいは、博物館教育とは何か、その根本的な問いを考えるきっかけにもなりうる一冊であるといってよいだろう。

【書誌情報】

発行：雄山閣（2022年5月31日）

体裁：A5判 並製本 カバー／244頁

定価：3,300円（税込）

ISBN：978-4-639-02821-5

（大木 真徳 青山学院大学）

《書評》 前川公秀著

『博物館の近代－朝鮮総督府時代の様相』

1. 本書の構成と概要

本書は、11章と付記によって構成される。

はじめに

第1章 李王家博物館

第2章 李王家徳壽宮美術陳列館

第3章 李王家美術館

第4章 王立博物館から官立博物館へ

第5章 朝鮮総督府博物館

第6章 総督府博物館の分館

第7章 二つの府立博物館と地域博物館

第8章 総督府が設置した博物館

第9章 様々な設置主体者による博物館

第10章 朝鮮での博物館活動の試み

終章 博物館人が抱いた夢

付記 動物園・植物園・水族館の状況

註／研究後記／掲載図版／関連の朝鮮博物館
年表／あとがき

本書は、1910年から1945年まで日本の統治下におかれた朝鮮半島で展開されてきた様々な博物館を対象として、設立の経緯や施設設備、展示普及活動等について整理された労作である。また、日本統治期の朝鮮半島に存在した博物館の全貌が網羅的にまとめられたものとしては、初の文献となる。

現代の韓国では、日本による統治期は“日帝強占期”、あるいは“日帝時代”などと呼称されているように、自国のアイデンティティが色濃く反映された植民地史観的な言説が普遍的なものとして浸透している。著者はそうした現状を確認したうえで、実証主義の観点から当該期を“朝鮮総督府時代”としてニュートラルに再整理し、純粋に「どのような博物館が設置されていたか」(p.3)を歴史的に解明することを目的としている。そのため著者も「資料集的な構成」(同上)と表現しているように、本書はいわゆる植民地主義博物館論という既成のフレームワークや、ポストコロニアル・スタディーズ的な議論を旨とするものではなく、朝鮮半島の近代化、植民地化という営みのなかで設立され、あるいは設立

が試みられた博物館の実態把握にミュゼオロジカルにアプローチした、純博物館史的な内容となっている。

2. 〈植民地〉朝鮮と博物館・博物館学

元来、「Museum」という西欧近代が生んだ制度は、西欧圏から非西欧圏へ輸入され、さらには非西欧圏から非西欧圏へと逆輸入されることによって拡張されてゆくが、日本は非西欧圏の代表格として自らの手で築き上げていった帝国を構成した朝鮮半島、台湾島、樺太島、関東州といった外地にも博物館を設立するなど、先導的な役割を果たしていく。米国の政治学者ベネディクト・アンダーソンは、そのような植民地国家がその支配領域を想像するための仕方(imagines)として人口調査・地図・博物館を挙げるが、この3つの制度を通して「その支配下にある人間たちがだれであるかという性格付け、その領域の地理、その系譜の正統性」⁽¹⁾が明示されることによって帝国の権力は維持されていくという。近代博物館の制度もまた、帝国による統治の正統性を立証する役割を担ってゆくことになるが、外地としての朝鮮半島にも実に多くの博物館が存在していたことに驚かせられると共に、膨大な文献史料から語られる複数のナラティヴからは、支配者たる日本人の手によって繰り広げられてきた擬似西欧的な文化帝国主義の実態がより鮮明になってゆく。

そのような〈帝国〉日本と〈植民地〉朝鮮という相互の関係性は、博物館での学芸活動にも及んできたことが裏付けられるし、興味深いのはそうした博物館の実態を伝える日本語の文献史料には、現地人の関与や痕跡がほとんどわかれぬ点にある。確かに開城府立博物館の館長には2代にわたって朝鮮人が就任するなどの事例も散見されるものの、大半は日本人も朝鮮人も帝国という巨大な共同体の臣民を構成しながらも、朝鮮総督を最高権力とした朝鮮半島の社会構造における支配層としての日本人、被支配層としての朝鮮人という明確なヒエラルキーが博物館活動にも波及していったことが想定される。つまるところ、本書によって詳らかにされているように“朝鮮総督府時代”の博物館は、帝国主義・植

民地主義に起因した側面をも孕んでいることがより一層露わになるだろうし、そうした内在的な要素を見過ごすことはできないだろう。

その一方、博物館史的なフィルターから俯瞰してみると、植民地史観のアプローチとは異なった別の視座も見えてくる。例えば、本書第10章の「帝室博物館制度の導入」では、李成市による学説⁽²⁾を補完するかたちで、黒板勝美が理想とした帝室御物の陳列と史蹟保存を旨とする国立博物館の姿⁽³⁾は、宮内省李王職による「帝室」的博物館としての李王家博物館、方や朝鮮総督府の制定による「古蹟及遺物保存規則」のもとに遺物保護の役割を担う「国立」的博物館としての朝鮮総督府博物館という二重構造として成立した可能性が指摘される。著者が言及するように、この試みは内地での東京帝室博物館における活動を補完するものであったことが想定される。

それに続く「美術館の理想の実現」では、美術館を古代美術館・近代美術館・展覧会会場（ギャラリー）の三区分に論じた正木直彦の美術館論⁽⁴⁾に着目しつつ、第2・3章で取り上げている李王家徳壽宮美術陳列館や李王家美術館の“美術館”としての性質に迫るが、内地では実現し得なかった近代美術館の姿が外地たる朝鮮半島での試みに見出せるという著者の指摘は、日本全体の美術館史を捉える上で非常に示唆に富む論点である。このように美術館制度にも着目している点でも特徴的であり、美術館での勤務経験を有する著者ならではの視座といえよう。

また「博物館教育活動のはじまり」では、朝鮮総督府によって設置された恩賜記念科学館を例に、初代館長に海軍軍人でもある重村義一が就任したという事実から統治政策に内包されるイデオロギーとの関連性が取り沙汰される一方、必ずしもその一面性のみでは語ることはできない多彩な教育活動の実態が明らかになってゆく。加えて、すでに先行研究の蓄積が進む満州国国立中央博物館での藤山一雄の活動に先立った博物館教育活動が見出せる点においても、恩賜記念科学館の先進性は注目される。

また、終章で取り上げる松村松盛、重村義一、佐瀬雄山、藤田亮策などといった“博物館人”の姿からは、〈植民地〉という内地とは異なる環境の下で

展開されてきた近代博物館思想の一端をも垣間見る。

このようにしてみると、外地たる朝鮮半島で展開されてきた博物館活動は内地と同等に、あるいはそれ以上に活発に実践されてきたことは想像に難くない。日本人の手によって実践されてきた近代博物館の営みを客観的に考察する上でも、“朝鮮総督府時代”の博物館史は多くの示唆を与えてくれるだろう。

3. 博物館学は、自己の歴史とどう向き合うのか

本書では、日本博物館史の“空白”についても取りあげるが、内地のみならず外地をも包含した「日本全体の博物館史が成立していない現状」（p. 372）に対する著者の問題提起こそが、本書が執筆された大きなファクターとなる。確かに、戦後博物館学のパラダイムにおいて、例えば、博物館史の規定に中心的な役割を果たしていった椎名仙卓をはじめとした著作でさえ、“外地”と呼ばれた日本の支配域にも確実に在ったはずの博物館の存在をも意図せずして隠蔽してしまっているかのようである。そうした“内地”偏向ともいうべき選別的傾向や、歴史の抹消にも繋がり得るような姿勢は、結果的に西欧中心主義的な価値観にルーツを持つ博物館学というディシプリン自体が、帝国主義・植民地主義の歴史とも密接に関わり合いながら育まれていったアカデミズムでもあるという自己の歴史でさえ顧みないことに加担してしまっているように思えてならない。それだけではなく、現在に至るまでの博物館のプロセスをよりダイナミックに捉える上でも大きな障壁となりかねない。われわれは、日本の博物館学もまたコロニアルな性格を温存しつつ継続的に構築されていることを自覚し、未整理の歴史と幅広く向き合い、あるいは批評的に再構築していくことの必要性を本書からは喚起させられる。

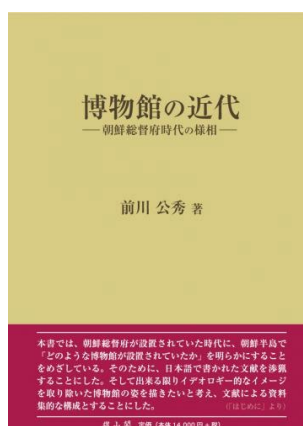
しかしながら、本書にも歴然として大きな課題は残る。日本による朝鮮半島の支配という歴史的事実に直面するとき、本書に示されるように単一的な解釈の揭示に終始したアプローチのみでは、支配者としての〈帝国〉、被支配者としての〈植民地〉という相互の経験が複雑に絡み合った領域にも位置する“博物館”そのものの本質を見失ってしまう恐れが

あり、両義的な歴史的文脈を踏まえたトランスヒストリカルな再検証がより重要となる。そのため、単純に博物館の制度的な側面だけではなく、その背景にあった当時の朝鮮半島における地域的、社会的な視座にもアプローチするべきであった。他方、著者も本書の冒頭に日本語の史料を対象としている反面、「日本固有の基層的な、あるいは統治的なイデオロギーを潜在的に包含している可能性」(p. 373)を認識していること、その上で「どのような博物館が設置されていたか」という問いに対するひとつのソリューションを提示することによって、双方向性の確保という今後の課題に向けた前提としての、プラクティカルなものとして位置づけることを試みようとしていることから、ポジティブに捉えられる。

そもそも、“博物館”という概念や制度自体、往年の哲学者や歴史学者、社会学者たちが指摘してきたように、帝国主義・植民地主義の歴史と無縁とは言い難い。なぜならば、かの国にとっての博物館とは、終焉した帝国の残骸であり、遺物でもあるからだ。本書の副題に掲げる“朝鮮総督府時代の様相”は、まさしく“日韓(日⁵韓)博物館史”そのものである。確かに両国間は現在でも様々な分野においてアポリアを共有しており、そういったセンシティブな歴史問題を扱うのは勇気を要するだろうが、ありのままの歴史を客観的に俯瞰し、専門知として共有してゆくプロセスは対話に向けたひとつの道標となるだろう。本書は、その前提としてアカデミアの彼方に忘却されていった歴史を掘り起こすことで空白を埋め、向き合うことによって学問としての内省的、あるいは可能態的なプラットフォームを提示した点においても、次世代の博物館学に向けた意義は大きいものがあるといっても過言ではないだろう。

とくに本書の大きな特徴は、実証主義的な研究を通して膨大な史料を網羅している点にあり、しばしば博物館史の研究に散見されるイントロダクション的な叙述方法やテキストの多くにみられるような原史料(原典・原文)の軽視や客観的立証・解釈の甘さが見られる傾向とは異なる。もっとも著者は、大学在学時の指導教員で、戦後日本の歴史学をリードしたことで知られる坂本太郎博士⁽⁵⁾の薫陶を受けて

おり⁽⁶⁾、堅実で精緻なエビデンスのもとにありのままの経験的史実をミクロに捉えることを試みようとするのも、その学風を垣間見ることができる。本書自体がより重厚で、ヴォリュームのある内容であり、かつ博物館史の基礎文献としての価値を持ち得るのも、これを補強する。もっとも、博物館の歴史と真正面から向き合ってゆくなかで、博物館史というディシプリンが“歴史科学”であるというひとつの原点を再認識させられる点においても、本書はひとつのメルクマールとなるだろう。



【書誌情報】

- ・株式会社雄山閣 発行
- ・2022年4月25日 初版
- ・B5判 函入上製本
- ・全376頁
- ・定価15,400円(税込)
- ・ISBN 9784639028352

註

- (1) Anderson, Benedict. 1991. *Imaging Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Verso. (ベネディクト・アンダーソン著、白石隆・白石さや訳 2007『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山)
- (2) 李 成市 2004「朝鮮王朝の象徴空間と博物館」宮嶋博史・李 成市・尹 海東・林 志弦編『植民地近代の視座—朝鮮と日本』岩波書店
- (3) 黑板勝美 1918「國立博物館について」『新公論』第三十三卷第五號、新公論社
- (4) 正木直彦 1934「正木直彦氏美術談」『美術雑誌アトリエ』第十一卷第一號、アトリエ社ほか
- (5) 1901~1987. 東京大学名誉教授、國學院大學名誉教授、文学博士。東京帝国大学文学部国史学科卒。同大学院では、黑板勝美・辻善之助に師事。東京帝国大学文学部助教授、同教授を経て、新制東京大学文学部教授、同史料編纂所所長、國學院大學文学部教授を歴任。
- (6) 著者の教示による。
(伊東 俊祐 独立行政法人国立美術館本部研究補佐員)